

会員の広場



ヒマラヤ山歩きの旅へ

内藤 哲（東京）

学生のと看、アジア研究のサークルに入っていた。このサークルの仲間3人でここ2年ほど、自由気ままにアジアの辺境の地への旅を楽しんでいる。卒業から半世紀近くを経ての「センチメンタル・ジャーニー」だ。

一昨年春にはネパールの首都カトマンズと

周辺の古都バクタブル、宿場町バンディブルなどを経巡ってきた。また昨年冬は、北インド北西部に広がる砂漠の大地ラジャスターンに点在するオアシス都市はじめ、ラジプート王国やムガル帝国の城砦遺跡などに足を運んだ。そして昨年11月には、ヒマラヤにトレッキング（山歩き）をしてきた。山好きな私にとって、若い頃からの憧れの地だ。

ただ仲間は72、71、70という古希トリオ。雪水の山に挑戦するにはいささか齢を取り過ぎてているし、それなりの健康リスクも抱えている。それでも雪水に輝く山群を間近に見る山歩きならできるだろう。4000^{メートル}を超す高度なので高山病の危険はあるが、ゆつくりと無理のないスケジュールなら大丈夫なはず

だ。半世紀越しの夢の実現といったら大げさだが、出発前にはわくわくするような昂揚感に包まれた。ランタン・ヒマールを歩くことにしたが、この地は、かつてイギリス人探検家ティルマンが「世界で最も美しい谷」と紹介した山域である。カトマンズからチャーター車

強い陽射しが暖かく気持ちがいい。周囲は紅葉に染まり、四囲の峰々は白銀に輝き、深い青空が広がる。標高3000^{メートル}超の「天空」のパラダイスといった趣だ。

車以北へ8時間、チベット国境に近い山域に入る。シヤルベジは谷底にあるバザールで、チベットとネパールとの交易で発達してきた町だ。ここからトレッキングを始める。マガール族（チベット系）の青年にガイドを頼み、ポーター二人に荷物を持ってもらう。荷を担いだロバやヤク、欧米人のトレッカーにもときどきすれ違ふ。急峻な岩山の谷沿いの道をゆつくりと登っていく。風は冷たいが、

トレッキングから5日目、ついにランタン谷を登り切り、氷河が張り出してきているキヤンジンゴンバ（3850^{メートル}）に到着した。ここがトレッキングの最終目的地だが、さらに眺望を得るためタルチョー・ピーク（4350^{メートル}）なる小峰に登った。空気は薄く息は苦しい。だが、峰の頂からは最高峰ランタンリルン（7228^{メートル}）が眼前に迫り、四囲の峰々は白い輝きに包まれ、足下には氷河が広がる……。この上ない幸せなひとときであった。

（プラチナの氷雪の山 天を突く）